

5. 研究開発の成果

(1) 実施による効果

① 児童への効果 以下に、例として2つの学習分野の具体的な子どもの姿を挙げる ＜ことばの学習から＞

6年生パネルディスカッションの学習ノートより

- ・私はこの学習の初め、批判をするというのは悪いものだと思いました。ですが今回は批判することが「とてもいいこと」と言われたので練習のときは批判しか言ってません。けっこう楽しくて自分でもビックリでした。私は、批判するという事は、その意見の味を良くするスパイスなんだなぁと思いました。
(K子)
- ・参加者からの質問がきついと言い返すのがむずかしい。思いもよらない質問をされてびっくりした。でも堂々と言い返すのが大切だ。(T男)
- ・ぼくがパネルディスカッションをやったことは、自分の意見を聞いてもらおうとうれしいし、質問がくるということは、みんなが理解してくれたということなのでおもしろいと思いました。討論者と聞いている人が自分の意見をはっきりと主張することがいいことだとぼくは思いました。(M男)
- ・いろいろ意見を言っていた人、言える人は、いろいろ知識があつてすごいと思った。(S子)

ノートの言葉からわかるのは、主張するには知識が必要であるという気づき、異なる視点の提示にたじろがない勇気と表現力、批判的思考によって考えが良くなるという実感である。これらは単元・授業を通して育成可能な「公共性リテラシー」を示している。「公共性リテラシー」育成には、対話力（自己と他者の対話、自己内での対話）、関係の中で使いながら磨く語彙力が欠かせない。

＜市民の学習から＞

これからの社会を創造する子どもに培う中心的な「公共性リテラシー」は、以下の3点である。

(1)社会的価値判断力 (2)意思決定力 (3)「社会を見る3つの目」

○社会的価値判断力

社会的価値判断力とは、社会的な事象に対して「良い・悪い」「すべきである、すべきでない」と価値づけたり、評価したりする判断のことだ。例えば「水道水よりミネラルウォーターを飲む人が増え続けている。良いのか」という問題に対して「良い」「仕方ない」「ダメ」と判断は分かれる。社会的価値判断をするためには、事実の認識だけでなく、多面的に社会的事象を見る力や、問いをもつ力、批判的に考察する力などが必要である。子どもたちは、自他の価値観の違いを発見し、それらを相互に吟味しあうことで、価値判断力は磨かれる。

○意思決定力

意思決定力とは、価値判断にもとづいて目的実現のために「何をすべきか」「どのような解決策がより望ましいか」と合理的な策を選択・決定することだ。例えば、より多くの都民が水道水を利用するには、「さらに美味しく」「安全性を高める」などの策から選択したり優先順位をつけたりすることになる。具体的な情報を収集して社会認識を深める中で、自分なりに考え、さらに他者から賞賛や反論を得ることを通して、最終的な自分の考えを決定していく過程が、市民で育てる「公共性」といえる。

○「社会を見る3つの目」（今年度から、イ、ウを変更した）

「社会を見る3つの目」は、民主主義社会の認識の仕方として根幹となるリテラシーである。

ア 社会には、一個人の工夫や努力では、できることと、できないことがあること。

イ 自分の利益と、他者やみんなの利益は、必ずしも一致しないこと。

ウ だから、世の中には、広い視野から社会を調整するしくみが必要であるとともに、それらの仕組みに対して関心を持ち、自ら働きかけようとする意識をもつことが必要であること。

広い視野から社会を調整する仕組みの必要性を感じさせ、ある決定の実行に伴う人々の不利益を最小限にする大切さを考えられるような、葛藤を感じる①タイプの社会的事象に出あわせる必要がある。

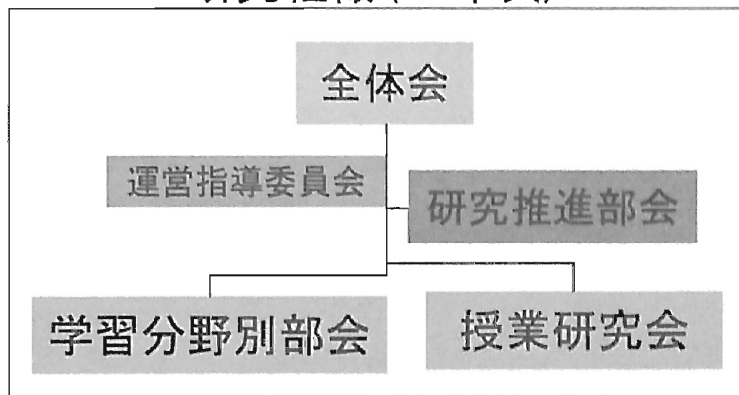
② 教師への効果

<授業研究会後にウエイトをおく省察スタイル>

授業者は、A4の1枚学習指導案に授業のねらいや「公共性」に関する考えを簡潔にまとめる。参観者は付箋紙をもって、①子どもの学び、②教師の関わり、③「公共性リテラシー」に関すること、④その他をメモする。授業後の話し合いで、付箋紙をKJ法で論点分類整理して報告する。「私が今日学んだこと（ふり返り）」を短く書いて研究推進部に提出する。研究推進部では、1週間以内にまとめて「ふり返りのふり返り」を書き加え、全体会で配布した。その後、実践記録を書いて読み合った。

これらの一連の省察スタイルによって同僚のもの見方、自分になかった視点を発見したり、「公共性」に限らず、教育に対する考え（思想）を共感的批判的に深めることができた。深めるというのは何か明確になるだけでなく悩みが増えることも多い。新たな課題のタネが見つかるのが、授業研の適切な姿だと考えられた。

研究組織（2年次）



（11月の算数の授業研究会後の教師の「ひと言一覧表」より抜粋）

A教諭：何でも言えて、子どものつぶやきもよく聞こえてくる教室空間。子どもの発言が課題解決のための手がかりになっていくといいな。

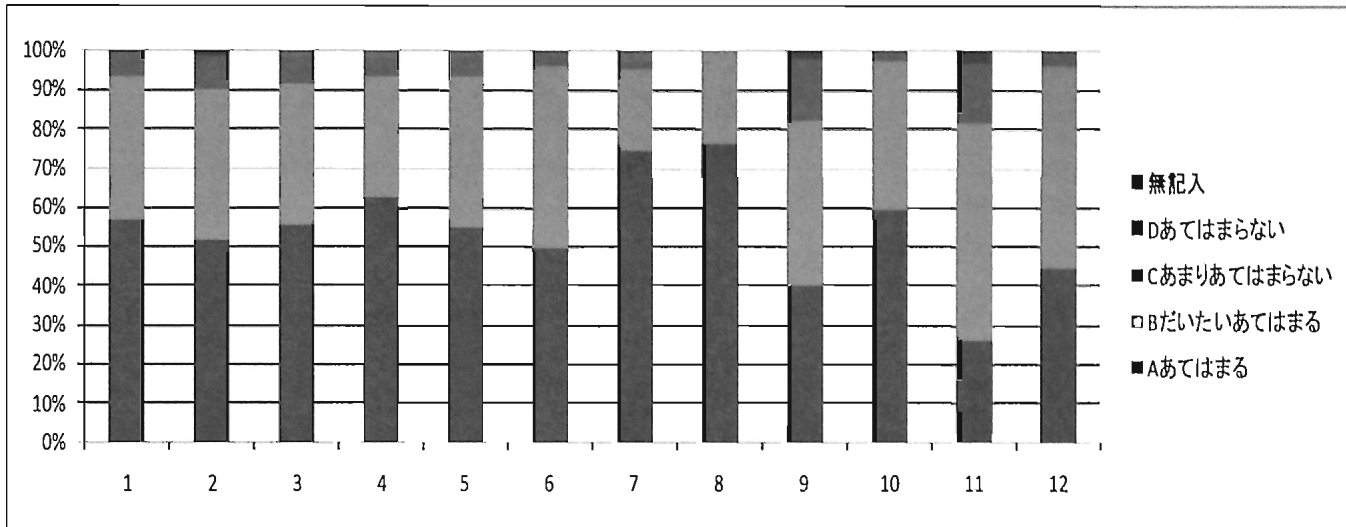
B教諭：もくもくと書く子ども、なんでもかんでも口に出す子ども、なにがどうなっているか分からない子ども。皆が同じ土台にあるための授業形態はひとつではない（固定されてはいない）。自分の授業もよく考えたい。

C教諭：「公共性」を考えるといかに子ども対子どもにしていくかということが、我に課せられたことだと再確認。

D教諭：子どもが話すー聞く、という学びの関係がクリアな空間の中で教師に支えられながら進行していた。違いを出し話し合う前に、条件を共通理解して始めることを自分の授業でも意識したい。

③ 保護者への効果

教育活動に関するアンケートを11月に2年生と5年生保護者対象に行った（回収率は約80%）。集計結果（下表）から「賛辞」が高いのは「7 研究活動を適切に行い、研究校としての使命を果たしている」「8 研究開発学校として特色ある教育活動を各学習分野で工夫している」。反面「要望」が高いのは、「11 学校での子どもの様子がよくわかる」「9 学校行事に保護者が参加しやすい」の項目である。次年度への改善の視点としたい。



(2) 実施上の問題点と今後の課題

① 『学習における「公共性」育成プラン』の完成に向けて実践研究時間の確保

「公共性」というテーマは「人はみな違う」という大前提から出発している。一斉に特定の価値を教え込むのではない教育によって、民主的な社会認識ができる子どもを育てたい。それには、教材開発と教師の意識改革・授業改善が何より重要である。各学習分野の授業研究は当然として、考えの異なる教師同士が話し合い、葛藤や対立をのりこえながら実践研究する時間を確保しなければならない。日常の教育活動を最優先で大事にしつつ、学校全体運営の中で研究時間を年間計画の中にかかにして十分に確保するか、自分たちの大きな課題である。

② 「公共性リテラシー」の省察・評価方法の開発

複数の教師による省察というアプローチを教師の評価力向上のために校内研に取り入れた効果は大きかった。子どもの学びの姿から「公共性リテラシー」を探究・育成するという目的に向かって、授業研究会＋実践記録＋読む会を繰り返すことの可能性と手応えを得ることができた。しかし、実践記録を書くこと、グループで読むこと、どちらにも視点改善の余地がある。3年次も、複数の教師が知見を合わせる省察によるアプローチは続けるが、やり方を改善しながら「公共性リテラシー」の評価の観点の具体化に向けて取り組んでいく。

③ 教育課程全体の評価と見直し

来年は開発研究3年次のまとめになるので、本校の学習分野による教育課程編成がシティズンシップ教育として有効であるか、その教育的な価値を考察していく。その際、外部評価を積極的に取り入れる。